

修士論文（要旨）

2025 年 1 月

美容整形・美容医療希望者の個人特性に関する研究

指導 石川 利江 教授

国際学術研究科

国際学術専攻

心理学実践研究学位プログラム ポジティブ心理分野

223J2060

小坂 紀久乃

Master's Thesis (Abstract)

January 2025

A Study on the Personal Characteristics of Individuals Seeking Cosmetic Surgery and Aesthetic Medicine

Kikuno Kosaka

223J2060

Master of Arts Program in Positive Psychology

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Rie Ishikawa

目次

第 1 章：はじめに	1
1.1 美容整形・美容医療の現状	1
1.2 美容整形・美容医療に対する意識の変化	1
1.3 先行研究	2
1.4 目的	3
第 2 章：方法	3
2.1 調査期間	3
2.2 調査対象者	3
2.3 調査方法	3
2.4 調査内容	3
2.5 倫理的配慮	5
第 3 章：結果	5
3.1 分析対象者	5
3.2 整形願望	5
3.3 年代ごとの差の検定	8
3.4 性別による差の検定	12
3.5 過去の体験による影響の検討	13
3.6 価値観と整形願望の相関	19
3.7 整形願望と性別による比較	22
3.8 整形願望に影響を与える要因の検討	26
第 4 章：考察	28
4.1 性別と年代による整形願望の比較	28
4.2 過去の体験による影響	29
4.3 価値観と整形願望	29
4.4 整形願望と自意識	29
4.5 整形願望と本来感	30
4.6 整形願望と完璧主義	30
第 5 章：研究の限界と今後の展望	31
引用文献	32
資料	34

要旨

近年、美容整形・美容医療(プチ整形)は身近なものとなっている。厚生労働省¹ (2024)の報告では、施術の幅が広がると共に心理的ハードルも低くなり、比較的侵襲性の低い施術を中心に需要が高まっていると述べている。さらに医師や医療機関も増加している一方で利用者からの相談件数や危害事件も増加していることも報告されている。美容整形・美容医療を望む理由には複雑な心理状況が存在し、谷本(2012)は、美容整形・美容医療を受けたいと考える人は、考えない人に比べて自分の心地よさを語りつつも他者の目も気にしているため、美容実践を求める気持ちと関連している項目について検討していくべきであると述べている。そこで本研究は、美容整形・美容医療を受けたいと希望する人々の特徴を検討し、個人特性を明らかにすることを目的として実施した。

本研究では、メスを使用する「美容整形希望」メスを使用しない「美容医療希望」どちらも希望しない「願望なし」に分類し、自意識尺度(菅原, 1984)、本来感尺度(伊藤・小玉, 2005)、多次元完全主義認知尺度(小堀・丹野, 2004)を使用し整形願望の比較をおこなった。また、過去の影響を検討するために顔に対するネガティブ体験、ポジティブ体験があるか問い、分析をおこなった。さらに、運動能力、経済面、性格、地位・名誉、顔の美しさ、成績、芸術センス、体型・スタイルの8つの価値観の重要度を求め、整形願望との関連を検討した。

結果、整形願望なしと回答した人は117名(52%)、美容医療を希望した人が82名(36.5%)、美容整形を希望した人は26名(11.5%)であった。性別で比較したところ、女性の方が男性より整形願望が高いことが明らかになった。年代別の比較では10代と20代の美容整形希望者が多く、50代は美容医療を希望する者が多いことが明らかになった。次に過去の体験が整形願望に与える影響について検討したところ、ネガティブ体験はやや影響が見られたものの、ポジティブ体験ともに大きな影響はみられなかった。

価値観と整形願望との関連については「整形願望」との相関で最も高かったものは「顔の美しさ」であった。続いて、整形願望と性別を独立変数とした二要因分散分析をおこなった。はじめに公的自意識は女性より男性の方が有意に高く、整形願望では願望なし群より美容医療希望群、美容整形希望群の方が有意に高いことが明らかになった。私的自意識は有意差がなく、私的自意識、公的自意識ともに交互作用は見られなかった。本来感尺度では交互作用がみられた。また、美容医療希望群より美容整形希望群の方が本来感の得点が有意に高いことが明らかになった。完璧主義尺度では交互作用がみられた。また、高目標追求、完全性追求、ミスへのとらわれの3因子ともに整形願望なし群と美容医療希望群より、美容整形希望群の得点が有意に高かった。さらに、整形願望に影響を与えている要因を検討するため、整形願望を従属変数とした重回帰分析を実施した結果、整形願望と関連のみられた変数は「年代」「性別」「公的自意識」であった。中でも公的自意識との関連が強いことが明らかになった。

分析の結果から、女性の方が容姿を重要視し、若年層では侵襲性の高い美容整形で美しく、中高年では若く見えるよう美容医療を通して施術を望んでいる可能性が示唆された。また、現代の美容整形・美容医療は大きなコンプレックスや過去の辛い体験などがない場合であっても整形をしたいと感じており、身近な存在になっていることが考えられる。整

形願望を持つ人々は、周囲から見られている部分に向けられた自意識が高く、完璧主義の傾向が高いことが示唆された。しかし、従来の整形に対するイメージとは異なり、すでに本来の自分を自覚し、より良い状態を求めて整形をしたいと感じている可能性が考えられる。

本研究の限界として、実際の経験者との違いについては検討していないため、実際危険な整形を繰り返す人の心理的特徴については明らかになっていない。今後は経験者との比較をおこない、希望するだけでなく実際に施術を受ける人の特徴や危険な整形を繰り返す心理的状況を検討していく必要がある。

引用文献

- 八田武俊・岩原 昭彦・唐沢 かおり・八田 武志(2007).日本人中高年女性の化粧行動に関する研究—自意識との関係分析の結果から—. 人間環境学研究 5 巻 1 号 p. 1_45-1_49
- 平川祥子(2006). 女性の身体美志向に関する研究の現状：身体美に関連した問題を踏まえて. 教育方法の探究 9 81-87
- 平野麻依・井上果子(2006). 青年期女性における容姿志向性 容姿志向性尺度作成の試み. 日本心理学会第 70 回大会
- 飯野 智子(2008). 男性の美意識の変化：その可能性. 実践女子短期大学紀要 第 29 号
- 伊藤正哉・小玉正博(2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討. 教育心理学研究 53, 74-85
- 川副樹・板橋直人・清野純子・宮城純子(2024). 美容整形手術を受けて満足な容貌となった人の心理過程 ～目元の手術の場合～. 日本看護科学会誌 J. Jpn. Acad. Nurs. Sci., Vol. 44, pp. 328–337
- 小堀修・丹野義彦 (2004) 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み
パーソナリティ研究 第 13 巻 第 1 号 34–43
- 国民生活センター(2023). 国民生活センターホームページ. アクセス 2025 年 1 月 8 日
https://www.kokusen.go.jp/news/data/n-20230830_1.html
- 厚生労働省¹ 医政局(2024). 資料 1 美容医療に関する現状について. 厚生労働省ホームページ. アクセス 2025 年 1 月 9 日,
<https://www.mhlw.go.jp/content/10803000/001363278.pdf>
- 厚生労働省² 医政局(2024). 美容医療の適切な実施に関する検討会の議論の状況について. 厚生労働省ホームページ. アクセス 2025 年 1 月 9 日,
<https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/001322785.pdf>
- 松下愛子・遠藤 野ゆり(2023). 美容整形経験者に見られる「本当の自分」感についての考察
法政大学キャリアデザイン学部紀要第 20 号
- 松下戦具(2018). 美容整形への抵抗感の構造. 日本心理学会第 82 回大会

仲野芳恵(2024). 中学生が容姿に関する悩みを持ち始めるきっかけについての検討. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 145, 147-163

中山真(2023). 美容整形に対する態度尺度作成の試み. 皇學館大学紀要 61 (1), 151(102)-139(114)

日本整形外科学会. 整形外科と美容外科. 公益社団法人 日本整形外科学会ホームページ. アクセス 2025 年 1 月 8 日, https://www.joa.or.jp/public/about/cosmetic_surgery.html

朴建映・山際勇一郎・沼崎誠(2022). 日韓の女子大学生における自己モノ化と整形願望の関連性. 自己モノ化を予測する心理的要因の検討. 日本心理学会第 86 回大会

菅原 健介(1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み. 心理学研究 55 巻. 3 号 p. 184-188

鈴木 公啓(2017). 美容医療(美容整形およびプチ整形)に対する態度 —経験の有無や興味の程度による比較—. 東京未来大学研究紀要 Vol.11. pp.119 – 129

高島・五十嵐・平尾・村川(2009). 美容専攻学生の自意識と化粧の心理的効果. 山野研究紀要. 第 17 号

谷口俊治・石井梨瑚(2016). 身体メディアとしての美容・化粧行動に及ぼす理想の女性像と自意識他者意識の影響 —女子大学生による予備的検討—. 文化情報学部紀要, 第 15 巻, 89—106 頁

谷本奈穂(2012). 美容整形・美容医療を望む人々 —自分・他者・社会との関連から—. 関西大学総合情報学部紀要「情報研究」第 37 号

谷本奈穂 (2014). 特集美容医療社会学からひもとく美容整形と美容医療. 国民生活センター. アクセス 2025 年 1 月 8 日, <https://dl.ndl.go.jp/pid/12309576/1/1>

谷本奈穂(2019) . 美容整形と化粧の社会学 (新装版) プラスティックな身体. 新曜社

矢野経済研究所(2024). 株式会社矢野経済研究所. アクセス 2025 年 1 月 8 日, https://www.yano.co.jp/press-release/show/press_id/3570